

ビルマ僧の教化活動

——元政治囚の僧侶たちの場合——

馬 島 浄 圭

二〇一二年三月にテインセイ政権が誕生して以来、ビルマ（ミャンマー）は確かに変わりつつある。自宅軟禁が解かれ、今年二年ぶりに諸外国外遊を果たしたアウンサンスーも、ノーベル平和賞受賞記念講演（二〇一二年六月一六日、ノルウェー・オスロ）^{（註一）}の中で述べている。「……この一年、民主主義と人権を信じてきた人々の努力がビルマでやっと実り始める兆候が表れています。正しい方向への変化があります。すなわち、民主化へ向けた措置がとられていくのです。……」と。

ただ、同講演ではこうした変化の兆しとはおおよそ無縁の、多くの忘れ去られがちな人々（政治囚、難民、移住労働者、人身売買の犠牲者、強制移転で土地を追われた人々）について、引き続き援助が必要であることを強く訴えている。仏教でいうところの「四苦」「怨憎会苦」「愛別離苦」を引きながら、とりわけあとの二つの苦しみに遭遇しているこれらの人々を具体的な手だてで「思いやる」ことを求めている。さらに、「……前向きで健全なあらゆる思想、あらゆる言葉、あらゆる行動が平和へ貢献するものです。私たち一人ひとりがそのような貢献ができるのです。安心して眠りにつき幸せのうちに目覚められる平和な世界を作りあげる試みを行うために互いに手と手を取り合います。……」と、呼びかけている。

（註一） http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/peace/laureates/1991/kyi-lecture_en.html

ここで取りあげる三名のビルマ僧たちも、「民主化に向けた措置」によって刑務所から解放された「元政治囚」である。まずはその略歴をなぞってみたい。

トンダラウンタ師

一九五二年生まれ（六〇才）。マンダレー管区ミンジャン郡区出身、一二才で出家し沙弥となる。一九七九年〜一九八一年までマンダレー市の名門マソーイン教学僧院で学ぶ。コーウイダビウンタ師とヤーザダンマビウンタ師に師事。^{（註2）}この頃上級レベルの仏教学位ダンマサリヤ（説法師）試験に合格。その後ミンジャンの僧院で五〇人以上の沙弥の教育にあたる。

一九八八年の反政府大規模デモではミンジャンの僧侶リーダーの一人として関わる。一九八九年三月二五日（三六才）に逮捕・投獄され、以来二〇一一年一〇月二日（五九才）に解放されるまで、二三年間政治囚として獄中生活を^{（註3）}送る。

現在はミンジャンの村に戻り、貧しい村人の生活を支えるため植林・井戸掘りを試みたり、沙弥教育を手がけたりしている。

- （註2） 共に一九九〇年の「僧侶による大規模ストライキ」の指導者の中の一人で、逮捕・投獄された。コーウイダビウンタ師は一年後に解放されアメリカに亡命。二〇〇七年の「僧侶の大規模デモ」の折も海外から支援され、二〇〇八年に八三才で亡くなっている。ヤーザダンマビウンタ師（八〇才）は二年後に解放され、現在はマソーイン教学僧院（約三〇〇名の学僧）・新マソーイン教学僧院（約三〇〇〇名の学僧）の僧院長を勤めておられる。今年五月来日されお会いした際、軍政から国家サンガ大長老委員会のメンバーになるよう求められたが、固辞されたと話しておられた。
- （註3） 『罪と罰』二〇一二年七月一〇日、『良心の美しさ』二〇一二年七月二日、『自分の間違いを知らない事が最大の間違いである』二〇一二年七月一四日、ウ・トンダラウンタの手紙日本語訳参照

ザワナ師

一九六〇年生まれ（五二才）。ペグー管区ダイウー郡区出身、一〇才で出家して沙弥になる。二年後、ラングーン・マンダレーに遊学し、やがてダンマサリヤ試験に合格。

一九八八年の反政府大規模デモには、ダイウー郡区の抗議活動にリーダーの一人として参加。同年九月の軍部のクーデターでは、弾圧を逃れる抗議行動者たちを寺院にかくまう手助けをする。その後もラングーンで私設の仏教センターを立ち上げて、政治家や反政府活動家と接触し続ける。一九九三年、国連のビルマ特使横田洋三氏がビルマを訪れた際、僧侶に対する人権侵害の実態を報告するため密かに会いに行く。その直後逮捕され、二九年の禁固刑を宣告される。一九九七年の恩赦令で一九九年に減刑され、二〇〇九年九月に解放される。国内に居続けることが危険となり同年一二月、タイ国境の町メソットに逃れる。^(註4)

不法滞在のまま長くタイに住み続けることもできず、NGOの支援で二〇一一年一〇月一日にチェコ入りし、難民認定され亡命生活を送る。僧侶詩人としても著名で、過酷な事務所体験にまつわるエッセーや詩もたくさん書いている。それらはタイ・チェンマイで発行しているイラワジ誌のオンライン版に掲載されている。

いつの日かビルマに帰り、困っている子ども達のための、温かなホームのような寺をつくる事を夢見ている。^(註5)

(註4) ザワナ師の略歴、日本語訳参照。

(註5) 『夢見る人の冬の国』・『フレンドリー ボイス』ウ ザワナ著、日本語訳参照

エインダカ師

一九五三年生まれ（五九才）。マグウエー管区ミョウテ郡区出身、一五才で出家して沙弥になる。修行途中で師匠が発病し介護のため修学課程が遅れ、二八才になってやっとマンダレー教学僧院で学ぶ機会を得る。

一九八八年当時はヤンゴンの青年僧侶連合の監査長を勤め、抗議デモに参加する。その後一九九〇年のヤンゴンにおける「パッタニツクツジヤナカンマ」(覆鉢^{註6}＝軍政関係者とその家族への不受不施)デモにも加わり逮捕され五年の禁固刑となる。この時、現在住職を勤めているマツギン僧院の初代住職ワーヤマパンニ師(ワーサワパンデイタ師とも呼ぶ^{註7})に出会い、五年間獄中生活を共にして影響をうける。

一九九五年解放されてから、ヤンゴン大学の通信教育で哲学を専攻し、学士号を得る。当時住職を務めていたマツギン僧院では、HIV患者の介護や、孤児や貧しい家庭の子供たちを引き取り、教育を施したりして面倒をみていた。二〇〇七年の「僧侶による反軍政大規模デモ」にも参加し、同年九月再逮捕され、二〇一二年一月一三日に解放される。

現在は、軍政の弾圧による襲撃で壊されたままだった、ヤンゴンのティンガンジュン区にある自房のマツギン僧院に戻り、再建に励みながら、一〇人ほどの沙弥の面倒もみている。将来的には僧院で再びHIV患者のターミナルケア、孤児や貧しい家庭の子どもたちに寺子屋教育、職業訓練、英語教育、行き場のない元政治囚のシェルターなどを手がける予定である。

(註6) ウ エインダカの手紙二〇一二年六月一二日、『覆鉢』二〇一二年七月九日ウ エインダカ著日本語訳参照。

(註7) ワーヤマパンニ師はウヌ元首相の信認を得ていた高僧で、インド・チベットで仏教を学び数カ国語に通じ、タイ・ラオス等で仏教を教えるなど豊富な海外経験を持つ。インド留学中、有名なインド人作家ラーフラ・サーンクリットイヤーヤンと親交を深めている。ネウイン軍政下時代から度々投獄され、一九九〇年の僧侶によるポイコットの精神的支柱の一人でもある。獄中の大部屋にいるときは、政治囚の学生たちに乞われればいつでも仏教を教えたり英語を教えたりして、当局の勘気に触れその都度独房に隔離されている。最後は一九九〇年から八年間の投獄に耐え、二〇〇五年八三才で亡くなっている。「常に清らかなころでいなさい」というのが口癖であった。

トンダラウンタ師とエインダカ師は、私宛の省察の結びに次のようなことを書いています。

「国と国民のため活躍している人間には賛成する。自分のグループと個人のためだけに活躍している人間には賛成しかねる。人類に貢献している人間を尊敬するべきである。ある箇所でも部分的に貢献し、活躍している人間も、広い見地に立って全体のために貢献し活躍できるようにすることが期待される。遠い将来を想像し、良い未来の見通しができるよう、より良心的に気づくことが必要である。仏陀は、他の人の身になって思いやることを、仏陀になる前の多くの前世から重視し、実行してこられた。

①ローカッタサリヤハ生きとし生けるものすべてのものを憐れみ助けること②ニヤータッタサリヤハ同類の為を思い助けること（人類だったら人類全体の為、猿だったら猿類全体の為など）

仏教には人種、肌の色、地位などの差別が全然ない。自らダンマ（真理）を理解し自分で実践できるよう教えるため、俗世で主張されている自由（発言の自由など）よりも、自由で平和なわけである。したがって、私も上記の二つの教えを現代の世界に当てはめて話すようにしているのである。（註3）ウ トンダラウンタ『良心の美しさ』より」

「どの国においても、国民とは、自分たちの生活の改善に貢献し、開発に貢献してくれる政府を求めるわけである。ある家庭、ある学校、ある国家で、抑圧する側や抑圧される側が存在し続ける限り、平和にはなれないし、進歩もできない。抑圧する方もされる方も「不安と怒り」を抱いているに違いないのである。この怒りや不安を捨てて、改善しようとする両方が努力すべきである。そうすれば、諸外国も歓迎するに違いない。国民に貢献しようとする政府が現れ

ない限り、世界においてもミャンマーは国家として恥しいし、国民の生活も悪化し、平和にもなれないのである。仏陀の教えた瞑想もこのような状況では有効にはならない。国家も早く改善し、高い知識を持った国民が増え、正しいことができるようになることを私は祈っている。

- ・ 執着と無意識を抱えている限り、苦しみが増す
- ・ 執着を捨て、意識的に行えば、改善が望める
- ・ すべての生き物は、安穏であれ。(註6) ウ エインダカ『覆鉢』より

ザワナ師はそのエッセーで、過酷な刑務所生活における慈悲の実践が我が身を救ったことを述べている。ザワナ師はじめ政治囚が、家族が差し入れる貴重な金品を出し合って、貧しい飲んだくれの刑務所役人の幼い娘の教育をサポートして、心を通わせていくエピソードである。

「刑務所役人たちによる心理的圧迫に、刑務所内の私たちの誰もが苦しまなければなりませんでした。カリカリしたり物事に敏感になったり。それは仏教で言うところの「怒り」と呼ばれるものでしょう。慈悲こそがその怒りからわが身を守るしくみでした。慈悲は人の心を和らげてくれます。ですから、刑務所に入るとすぐに仏の教えに従って慈悲を修練することに決め、その後実践しました。刑務所役人による残虐非道な行為に直面した時の慈悲の修練は、あたかも壊れたねじ回しでこの世で最も堅い石に穴を開けるようなものでした。日々の慈悲修練は、怒った看守によって一晩で止めさせられることもありました。(註5) ウ ザワナ『フレンドリー ボイス』より」

ビルマ僧の教化活動とは、健全な「身口意」三業による利他行に他ならない。軍政であれ個人であれ、仏陀の教えに違背する者・平和を乱す者はその行いを改めさせなければならぬ。生きとし生けるものの苦しみはこれを取り除

かなければならない。その慈悲の精神をより具体的なかたちで、人々に示していることが、まさに教化活動そのものになっているのではないだろうか。

追記

この原稿を提出するつもりでいた矢先（二月二八日）、ビルマ国内で僧侶たちがまたしても政府の弾圧の標的になってしまった。ザガイン管区のモンユワ（二〇〇三年五月二七日、遊説中のアウンサンスーチー一行の車列が軍政関係者に襲撃された場所。多数の死傷者が出て、アウンサンスーチーも負傷しその後三度目の自宅軟禁になった。）近郊の村で、軍部と中国資本の合併による銅鉞山企業の強制立退きと鉞害に苦しむ村人たちの抗議行動を支持して座り込みをしていた数百人の僧侶たちのテントに、深夜治安部隊が放水し催涙ガスをあびせたため、火災が発生した。

テント内で睡眠をとっていた僧侶や村人たちの多くがやけど負っている。逮捕されたものも出ている。この銅鉞山企業は、同地にあるビルマ仏教のアビダンマ（経典解釈）の集大成者として崇められている、レーディー尊師（故人）が瞑想修行された聖地に建つテイン（重要な儀式を行う大切な場所）を取り壊し始めていた。このことも僧侶たちの行動に拍車をかけていた。来日中のザワナ師は「ビルマには今もなお武力にたよって権力を手放そうとしない勢力が存在しています。彼らはただ私利私欲のために、権力にしがみついているのです。それゆえ、彼らはビルマ国民に対する無法と非道な脅迫を犯しています。人権侵害のうちのもっとも野蛮なことが、ビルマでは起きています。だからこそ、僧侶たちは身を犠牲にして人々を助けているのです。それが仏陀の慈悲の教えだから……。」と話してくださった。

元政治囚僧侶トンダラウンタ師の項で触れた、マソーイン僧院長ヤーザダンマピワンタ師は二〇一三年三月十三日（ビルマ人権の日）遷化された。世寿八十一歳。その遺徳を偲びつつ。